

緒方 大 内容の要旨

氏 名	緒方 大
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	乙第 1316 号
学位授与の日付	平成 28 年 5 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 4 号に該当
学位申請論文タイトル及び掲載誌	Usefulness of sentinel lymph node biopsy for prognostic prediction inextramammary Paget's disease 乳房外パジェット病におけるセンチネルリンパ節生検の有用性および予後因子の検証 European Journal of Dermatology 2016 年 1 月 2 日 掲載受理 学位審査委員（主査）教授 佐伯 俊昭 （副査）教授 山本 明史、教授 新井 栄一、教授 矢形 寛

論文内容の要旨

背景

乳房外パジェット病（Extramammary Paget's disease: 以下 EMPD）は通常外陰部に好発する皮膚付属器がんの一種である。大多数の症例は長期間表皮内がんとして転移を起こさずに経過する。しかしながら、一旦真皮内への浸潤が起これば、リンパ行性の転移を高率に來たし、肺・肝・骨転移のリスクが高まることが知られている。

近年、リンパ節転移の有無が非常に重要な予後因子であることも報告されている。

目的

初回治療時のセンチネルリンパ節（sentinel lymph node: 以下 SLN）生検によりリンパ節転移の有無を評価し、予後との関連があるかどうかを明らかにする。

対象と方法

組織学的に EMPD と診断した 59 例を対象とした。症例の集積は静岡県立静岡がんセンターおよび埼玉医科大学の 2 施設で行った。SLN の同定率、転移陽性率、平均同定個数を求めた。また SLN 転移陽性群と陰性群および転移個数別の予後解析、転移陽性のリスク因子について検証した。これらに関しては転移リスクのない表皮内病変を除いた 45 例を解析の対象とした。

結果

総計 139 個の SLN を同定し、その内片側の所属リンパ節に SLN が存在したものが 28 例、両側に存在したものが 31 例であった。SLN の平均同定個数は 2.4 個で同定率は 100%であった。転移陽性率は 16.9%で、さらに進達度別に分けると微小浸潤群は 4.1%で真皮深層以下の浸潤群は 42.8%であった。5 年全生存率は SLN 陰性群が 100%で SLN 陽性群が 24%であり、有意に SLN 陽性群の予後が不良であった（ $p = 0.0001$ ）。多変量解析による SLN 陽性のリスク因子は真皮深層

以下の浸潤群のみであった (0.0105)。また転移個数が2個以下の場合5年生存率は100%であり、3個以上の場合は0%であった。

結論

本報告の結果によると、初回治療時に SLN 生検を行った EMPD において、SLN 陽性群と陰性群の5年全生存率は有意に陽性群が不良であった。また真皮深層以下の浸潤が有意な SLN 要請のリスク因子であった。EMPD においてリンパ節転移の有無は予後に影響を与え、その数を正確に判定することは予後予測の大きな指標になる。そのため浸潤が疑われる EMPD に対しては SLN 生検を行うことが望ましいと結論する。